慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	野村兼太郎訳 英国経済史及学説上巻
Sub Title	
Author	金原, 賢之助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.10 (1922. 10) ,p.1496(122)- 1499(125)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19221001-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

家社會主義者としての著者の立場から、もう一つの批評は、クロポトキンのコスモポリタニズムに對してである。著者は飽迄現實に即して、國家生活を主張する。世界人と云ふものはあり得ないと云ふ。さうして白人對有色人種の差異を強調する。諸國の社會並に經濟狀態から、各國の社會運動がそれ〴〵の特長を持つてゐることは事實であるが、殊更らに國民主義を振翳す必要があらうか。マルクスの國際主義の實現は甚だ遠い將來においてであらうが、これに反對するの理由を見出し得ない。

要するに「無政府共產主義の根本批評」は、著者の私信にも云つてゐる通り、「此中の肝要の處を、頭の中に溜つてゐる儘を、一氣に書いたもの、氣持の勝つたもの」である。故に外國のドクトル論文にあるやうな組織と廣汎な文獻引用はこれを見出し得ないが、國家社會主義者としての著者の無政府共產主義に對する嚴正なる批評と所謂日本の學究者の著書には見出し得ない日本の諸學者、思想家に對する批評の開かれるのには興味を感ずる。この點において私は吉野博士と共に「平易暢達なる文字の中に、飽かずこの復雜なる問題を了解せしむる老手には敬服せざるを得なかつた」と云ひたい。（中央公論九月號時論參照）

（加田哲二）

野村兼太郎譯

「英國經濟史及學說」上卷

菊版　三五〇頁
定價二圓八十錢
岩波書店發行

前世紀の最後の二十五年間英國の經濟學者も亦經濟史に著しい貢獻を爲した。Birmingham の W. J. Ashley 教授と Cambridge University の W. Cunningham 教授とは此方面に雄たる人々である、と J. K. Ingram は述べてゐる。Birmingham 大學教授 W. J. Ashley 氏は既に述べるまでもなく現代斯界の權威者であり、十指に餘る名著を有してゐる。就中其 An Introduction to English Economic History and Theory は著名な、學者的な研究の集錄であつて、英國經濟史を研究するもの、必ず精讀しなければならぬものである。Volume I を分つて Part I と Part II となしてゐる。本書は此 Part I の譯書である。

原著は Part I を The Middle Ages と題して第十一世紀より第十四世紀に至る期間を取扱つてゐる。初版は一八八八年第二版は一八九二年第三版は一八九四年に出でゝゐる。Part II は之を The End of the Middle Ages と題して一八九三年出版せられた。第十四世紀より第十六世紀に至る期間を論じてゐる。

本書は三節より構成されてゐる。第一章はマナァ及村落共同團體、第二章は商人ギルドとクラフト・ギルド、第三章は經濟學說及法制を主題となし、順次に六節、八節、九節に細分されてゐる。そして各章の始めには其れが史料を載せてゐる。

彼はマナァを說〳〵に當つて十一世紀から始めるのが適當であると看做してゐる。何故ならば當時に於いて中央英國の全體が本質的に同一特徵のマナァを以て蓋はれたことは確かに疑ふことは出來ないし、又如何にしてさう云ふ狀態になつたのか少しも一致しないからしてそれ以前から始めることは出來ないからであると。從つて彼は、自由民と奴隸民と何れが先きであるか、マルク制度がマナァ制度に先立つてゐるか始めからマナァ制度であるかの問題には、マナァ制度自體を明かならしめる爲の外は論及してゐない。斯くして彼は第一章に於いてマナァ制度の一般を說明しマナァの起源、經濟的特徵、自由小作人の增加等に筆を及ぼしてゐる。

第二章に於いては先づ商人ギルドに言及する。「商人ギルド若しくはハンス――兩者は同意義に用ひられる――は最初商業を行ふ特權の獲得及維持を目的として形成された一團體であつた。――其特權は各都會に於いてギルドの仲間

が其他の住民に對して商業獨占の獲得を意味し、又同じく他の都會との通商の自由を意味する。商人ギルドは十一世紀の後半に發生し十二世紀には英蘭のすべての大きな都會に勃興した。クラフト・ギルドの勃興は大ざつぱに云へば一世紀後であつた。個々の例は早く十二世紀に起つたが一世紀後には更に無數になつて、十三世紀には製造業のすべての部門に又各産業の中心に現はれた。クラフト・ギルドは特殊の都市に於いて特殊の産業に從事したすべての職人の或共通の目的の爲の聯合である、」と述べてアシユレー教授はクラフト・ギルドの發生其商人ギルドとの關係に關しては折衷的の意見を藏してゐる。斯くして彼は商人ギルドの本質、クラフト・ギルドの起源、其都市當局者との關係、內部組織、經濟的性質、及當時の內國商業、外國商人等に關して詳細な說明を爲してゐる。

「以上吾人が述べた社會的發展はある意味に於いて自然的と呼ばれてもよいであらう。吾人は今や教會及國家の勢力が發展して行く社會に影響を與へたか何うか、又社會の活動を統一しようとしたか何うかを見やうとするのである、」と述べて第三章は先づ教會の教義を載せてゐる。

「世俗の財貨に關する福音書の教義は明白なものであつた。屢々富を追求することに反對して、富の追求は人間を神の奉仕から遠ざけ、よき種を枯すものであると人々に注意した。最高教父に依つて表された基督者道德が目的とするところは、單に明白な不正或は詐欺を防禦するのみでなく、基督の法則『凡て人にせられんと欲ふことは爾曹また人にも其のごとく爲よ』を果さんとするのである。そして十二世紀及十三世紀の神學者や教會法學者に依つて此說が如何に維持擴張されたかをよりよく了解するのには、彼等の著作から幾かの抽象的な命題を引出さんと試みるよりも、すべての中世神學者の最大なる者聖トオマス・アクイナスの議論を辿らんとするがよい。彼は此點に就いても、又當時の思索のすべてに就いて、何れにも其先驅者の教義を蒐集し、來るべき構造に根柢を與へたことを

と述べて以てアクイナスの正當價格論を詳細に論述してゐる。

「正當價格の說よりも更に直接に福音書の教に基いてゐた教會の教義は、利息の問題即貨幣の貸與に對して何等かの支拂を取ることに關して〻あつた。『何ものをも望まずして貸し與へよ』と云ふ教戒を强調するのは極めて自然なことであつた。最初利得の爲に貨幣を貸與することを禁止したのは唯僧侶を束縛する教戒的規定に過ぎなかつたが、西部歐羅巴に於いてはチヤアルス大帝の法令及第九世紀の評議會に依つて此禁止は俗人にまで擴張された。此後暫くの間此問題は注意されなくなつたが、十二世紀以降西部に於いて羅馬法の研究が復活すると共に教會員が再び新に利息の罪惡を注意するやうになつたことを聯想しない譯にはゆかない。」そして茲に中世紀の徵利問題に關する興味ある記述が爲されてゐる。

更に中世紀の經濟問題として研究を要するものは通貨の問題である。本章は之と同時に度量衡、通商の取締、麵麭麥酒及酒の條例及商人法等の諸法制の研究に頁を割いてゐる。

以上を以て本書の大綱を紹介し了へた筆者は茲に譯文に就いて一言を費すが至當であらう。唯筆者は校正に當つて多少の助力を爲した者であるからして特に讃辭を述べることは差控へる。自畫自讃と解せらるゝを避けたいからである。或は多少直譯的に過ぎると思はるゝ所や不備な點もないではないが、其れは譯者の歸朝の日を待つことゝしやう。大體に於いて平易な文辭を以て原著の意を傳へた點に於いて特に本譯書の價値を見出すことが出來やう。

既に譯者も其序文に於いて述べてゐるやうに原著は勿論今日に於いては多少訂正すべき點或は異說新說も無いではないが、尙依然英國經濟史として權威あるものたることを失はない。史學研究の必要益々盛に唱道せらるゝに當つて、筆者は此好參考書の譯出を紹介し得たことを欣ぶと同時に第二卷の譯了の早からんことを希望し、以て經濟史及學史研究の士に敢て推奬する次第である。（金原賢之助）